



「よりあい処 華」(福島県田村市都路町)にて  
Photo by Keiko Godo

## 巻頭●対談

# チェルノブイリとフクシマ、 ふるさとへのまなざし

写真家・映画監督 **本橋 成一** × **三浦 寛** 森林総合研究所 戦略研究部門 震災復興・放射性物質研究拠点長

1986年4.26のチェルノブイリ原子力発電所(原発)事故のあと、ベラルーシの汚染地域で故郷を離れることなく暮らしつつけた村人たちの姿を描いたドキュメンタリー映画『ナージャの村』『アレクセイと泉』を監督した本橋成一さんと、2011年3.11のフクシマ原発事故後の放射能汚染調査を続けてきた三浦寛さんにお話し頂きました。

**三浦** ●本橋さんは、1986年に旧ソ連(現・ウクライナ)で起きたチェルノブイリ原子力発電所事故\*の被災地であるベラルーシ共和国の村で、故郷の土地を離れることを拒んで暮らし続ける村人たちの暮らしを描いたドキュメンタリー映画をつくられています。

私は、2011年の福島第一原発事故によって一時避難区域となった福島県田村市都路町の森林で放射性セシウムによる汚染と森林・林業への影響について、継続的に調査をつづけてきました。

本橋さんの映画を拝見して、強く感じたのは、映画に登場する村人たちのふるさとへの想いと、私が調査を通して接した都路町の方々の想いに通じるものがあるということです。調査・研究を通して、被災者の方からの想いにどのように応えることができるのか、改めて問われたように思います。

本橋さんが、チェルノブイリの被災者の方々を映画に撮ろうと思われたきっかけは、どのようなところにあったのでしょうか？

**本橋** ●はじめてチェルノブイリを訪れたのは、事故から5年たった1991年のことでした。被災地の医療支援を行っていた友人からの誘いで重度汚染地区であるベラルーシのチェルネルスク市に行きました。

最初は写真を撮るためというより、現場をみたいという気持ちで訪れたのです。

事故の現場であるチェルノブイリ原子力発電所や白血病を発症した子どもたちが入院している病院を案内されて、事の深刻さと子どもたちのまっすぐな眼差しに、はじめはカメ



＊  
Key Words **ブジシチェ村の〈泉〉**

ベラルーシの東端、ロシアとの国境近くにある村。ムギ類とジャガイモやリンゴ、森のキノコ、牧畜など、大地の糧で何百年、何世代にもわたって暮らしてきた。村の中心に、地面から湧く水を木枠で囲った泉がある。この泉の水からは、チェルノブイリ原発の事故後も、放射性物質が検出されなかった。



ラをとりだすことすらできませんでした。

そのとき、最後に案内されたのが放射能で汚染されて強制移住区域とされた村々だったんです。「放射能に汚染された村」という話に、僕は勝手に荒れ果てた土地をイメージしていました。でも、案内された村で目にしたのは、ユートピアかと思いがうほどの美しい自然と、そこで生きる人びとの素朴な暮らしだったのです。

あたりまえのことかもしれませんが、放射能はにおいもなければ、みることもできませんから、高濃度に汚染された土地でも、美しい自然はそのままだったわけです。

**三浦** ●おっしゃるとおりです。わたしが通っている都路でもおなじで、自然は失われずに、ただ放射線がみえないのが厄介なところなんです。

それで、いつドキュメンタリーとして撮影しようと思われたのですか？

**本橋** ●はじめは作品にしようとは、まったく考えていなかったのです。しかし、村の人たちと関わるようになって、ごちそうになったり仲良くなつていく中で、考えが変わりました。あるとき、ひとりの牛飼いに「なぜ避難しないのか」と尋ねたのです。そしたら彼は、  
「どこへ行けというんだ。人間が汚した土地だろう？」と。

そのとき、この人たちを撮ろうと心に決めました。そして、「核の大地」ではなく「いのちの大地」という言葉が頭に浮かんだんです。もちろん、放射能で汚染された土地に生

きるということは、大変に重たい決断です。それでも、人生の大半をその土地で暮らしてきて老いを迎えた村人たちにとって、ふるさとを離れることは、放射能の恐怖よりも辛いことだったのかもしれない。

**三浦** ●ベラルーシにはこれまで30回以上も通われたとか。

**本橋** ●最初の2年で5回ベラルーシを訪れ、1993年に『チェルノブイリからの風』という子ども向けの写真絵本と、翌年『無限抱擁』という写真集を出しました。

**三浦** ●そこから被災地の家族を描いた映画『ナージャの村』へとつながるのですね。舞台となったドウヂチ村も強制避難地区ですが、主人公のナージャは当時7歳。家族はなかなか避難ができなかったようですね。

**本橋** ●事故が起きてすぐに30キロ圏内の人たち14万人が強制避難させられました。しかし、ベラルーシのドウヂチ村は、ウクライナのチェルノブイリ原発から170キロ離れた隣の村です。ベラルーシで避難命令が出されたのは、事故から3～5年後のことでした。避難命令が出ても、仕事も家もすぐにみつかるわけではありません。ナージャたちがチェルノブイリに引越したのは、事故から10年後のことでした。

『ナージャの村』のあと『アレクセイと泉』という映画を撮りました。定期的に汚染地域の放射能を測定している保険局の女性が、チェルノブイリの町から50キロほど東にあるブジシチェ村の泉＊の話をしてくれたのです。1995年の春のことです。

＊  
Key Words **放射性セシウム**

原発事故によって放出された放射性物質のうち、環境や健康被害への影響の大きさから注視が必要な物質。いくつかある同位体のなかでも半減期が30年と長いセシウム137の動きが、調査の主要な対象とされている。

＊  
Key Words **チェルノブイリ原発事故**

1986年4月26日に旧ソ連（現在のウクライナ）にあった原子力発電所4号機の暴発でおきた炉心溶融とそれに続く水蒸気爆発事故。北半球のほぼ全域に放射性物質が拡散したと考えられる。





## 本橋 成一 (もとはし せいいち)

1940年東京生まれ。68年に『炭鉱くヤマ』で第5回太陽賞受賞。91年よりチェルノブイリ原発と被災地に通い、汚染地に暮らす人びとを撮影。98年『ナージャの村』で第17回土門拳賞。映画『アレクセイと泉』で52回ベルリン国際映画祭ベルリナー新聞賞ほか受賞。写真集に『屠場くとは』『バオバブの記憶』(平凡社)、『アラヤシキの住人たち』(農文協)ほか。



「いま、長野県小谷村真木の共働学舎で、水車を使って製材し、古民家を再生するプロジェクトを進めています」

### 巻頭●対談

## 高濃度に汚染された土地でも、美しい自然はそのままだったわけです。

それは、村人が「100年の泉」と呼んでいる木枠で囲んだ湧き水でした。ふしぎなことに、この泉からは、まったく放射能が検出されなかったのです。村人は100年前の水だから、あたりまえだと言っていました。その泉のおかげで、移住を勧告されながらも村人たちは暮らしつづけることができたのです。そういえば、福島の水も放射能が検出されなかったそうですね？

**三浦** ●放射性セシウム(以下セシウム) \*が渓流を通して森からどれだけ流れ出ているかを継続的に調査(▼18ページ参照)したところ、水が澄んでいるときは検出されませんでした。大雨がふって濁り水が出ると、細かい粘土にくっついたセシウムが流れ出ていましたが、それが森林に降ってきたセシウムの何%になるか積算してみると、0.5%以下のわずかな量しか流れでていないのです。流れでていないということは、森林にとどまっているということです。詳しく調べると、セシウムは土壌の最表層に溜まっているということが確認されています(▼12ページ参照)。森林におおわれていると、放射性セシウムは流れ出ずに、そこに長くどまると考えられています。

**本橋** ●ブジシチェ村へ至る森の小径を通ると、放射能測定器の警告音が激しく鳴り始めるんです。そこはチェルノブイリ4号機の5キロ圏内とおなじくらいの強さでした。でも村に入ると、それほどではないんです。おそらく森の土壌に溜まっていたのでしょうね。

ところで三浦さんは、震災後から福島の森林調査をされているそうですが、どのような

調査をされてきたのですか？

**三浦** ●ここ福島県田村市都路町は、原発事故前からシイタケ原木の産地として有名なところだったのです。それが事故によって森林に放射性物質が降り注いで汚染されてしまったので、すべてが止まってしまいました。

原木は、食品であるキノコの栽培に使われるのに加え、キノコはセシウムを吸収しやすいので、食品基準の100ベクレル/キログラム\*より厳しい50ベクレル以下の原木でないとキノコ栽培に使えないのです。

都路町のある阿武隈高原一帯は、日本のシイタケ原木の一大供給地だったので、当初は大混乱になりました。

林業は前の世代の人たちが植えて育てた木を伐り、つぎの世代のために木を植える仕事ですから、自分たちは堪えるにせよ、つぎの世代のために植林した木が20年後に育ったときに原木として使えるようになるのか、それを知りたいというのが、生産者の方の強い要望でした。生産を再開したいが、再開して未来に希望があるのか、そこがいちばん知りたかったわけです。

森林総研は原発事故直後から、この未曾有の放射能汚染の実態を把握しようということで、森林の広範な調査をつづけてきました。その結果わかってきたことが、放射性セシウム137の森林内での動きなどです。

こうした研究によって、暮らしや林業の未来へむけての指針となるような基礎データを継続して提供したいと考えているわけです。

**本橋** ●先ほど森林組合長さんにお話をうか

◎本橋成一監督の映画



DVD『アレクセイと泉』『ナージャの村』

ツインパック

発売：ポレボレタイムス社

販売：新日本映画社

### \*Key Words ベクレル (Bq)

ある物体が放射線を出す能力の大きさの単位。ベクレル/キログラム (Bq/kg) は、1キログラムあたりの放射線の量。食品中の放射性セシウムの基準値は、飲料水が10Bq/kg、一般食品が100Bq/kgと定められている。



## 三浦 覚 (みうら さとる)

1959年島根生まれ。83年に東京大学農学部林学科卒業。博士(農学)。林業試験場土壌部地質研究室、森林総合研究所立地環境研究領域をへて、現在、震災復興・放射性物質研究拠点拠点長。森林立地学会理事。2013年～15年東京大学大学院農学生命科学研究科附属放射性同位元素施設特任准教授。著書に『原発事故と福島農業』(共著 東京大学出版会)ほか。



「都路町の里山で、風雪に負けず年ごとに丈をのばして林に育つコナラのひこばえに励まされます」



巻頭●対談

## 研究を通して将来への見通しとなる情報が提供できれば、「希望」となるのかなと強く思っています。

がったときに、「夢があるならやる」「夢が必要だ」といったことを話されてしまったね。20年後へ向けての夢を持てるなら、その可能性を示してくれる、いまは踏ん張って堪えて山を支え、将来の世代のために木を植えると話されていた。その話が、とても心に残りました。それは「未来への希望」ということだと思いますが、映画の主人公の女の子の「ナージャ」という名前は「ナジェージュダ」というロシア語で「希望」を意味する言葉からつけられています。

**三浦** 20年後に都路町の原木生産が事故前と同じように元に戻れるかと問われると、それは厳しいものを感じています。

森林の放射性セシウムは、大部分は地表にたまって動かなくなってきたことなどセシウムの動向がおおよそわかってきましたが、まだ確信をもって将来の汚染を予測できるまでには至っていないというのが現実です。

**本橋** 昨日シイタケの原木栽培をされていた方のほだ場をみせて頂きましたが、事故の日から放置された太い原木がそのまま朽ちている風景は示唆的でした。原木生産やシイタケ栽培に携わっておられた方たちに「希望」をもたらすことができるのでしょうか。

**三浦** 林業ですが、調査でお世話になっているみやこ旅館のご主人のように、春は山菜採り、夏は溪流釣り、秋はキノコ狩りと、そうした山のめぐみが暮らしの一部だった地元の人たちにとって、それらが汚染された不安はとても大きなことだったと思います。

森林総研では、そうした調査\*もやっています。

て、事故前には食べる楽しみ、山で探す楽しみ、採っためぐみを分かち合う楽しみといったプラスの喜びだったものが、事故後になると高汚染地域ではすべてマイナスになってしまいました。十分に予想されたことですが、そうした山のめぐみへの打撃は、なかなか数字には表れてこないだけに必要な調査だと思っています。

**本橋** 経済的な支えを失うと同時に、暮らしの喜びも奪われたということは、なかなか目にはみえてきませんね。

『アレクセイと泉』という映画に出てくるおばあちゃんのところには1カ月に1度行政の人が避難するように説得しにくる。いい家があるから引っ越しなさい、とすると決まっておばあちゃんが「うちには、ウマもブタもニワトリもいるよ。それにこないだ植えたばかりのリンゴの木もある。ぜんぶもっていいのなら、引っ越しよ」と返すんです。

よくが撮影に通っていた村の森林は、桁違いに放射能の数値が高いんです。でもキノコを食べたい年寄りたちは、食べるのをがまんするほうがよほどからだに悪いと勝手な理屈をつけて森のキノコをとって食べている。

**三浦** チェルノブイリでは、除染は？

**本橋** 森の中ではできないですね。農地は、場所によって除染したのだろうと思いますが。

**三浦** 日本の場合住宅地、農地は徹底して除染しました。宅地、農地の周辺だけは森林も幅20メートルほど落葉を取りのぞいて除染すると宅地、農地の空間線量率が低くなること調査でわかっています。



◎既刊特集を参考に

季刊 森林総研 No.36 (2017.2.28)

特集：森の文化力

### \*Key Words 「自然のめぐみ」の調査

福島県での「自然のめぐみ」について、汚染の低かった会津地方の只見町と、汚染の高かった川内村で調査し、比較した。事故後に自然のめぐみの利用は減っていたが、只見町での利用は少なくとも継続されていた。しかし、川内村では場所によって汚染の濃淡はあるが、ほぼ全域で利用はなくなった。『季刊 森林総研』30号「天然の山菜・キノコ採り」、36号「山菜をめぐる地域文化」松浦俊也参照。



放射性セシウム濃度が高くなりやすいコシアブラの新芽

森林総研では、野生の山菜やキノコなどを採取する際の注意情報や放射能関連の資料を公表している。

森林総研 HP から > 森林と放射能 > 特産林産物をご覧ください。



汚染された森でキノコをとるアレクセイ

リシーチカという黄色いキノコは特別に美味しいキノコで、村人たちの大好物だった。森が汚染されたことは知っているが、アレクセイは逡巡しつつも、老人たちの頼みを聞いてキノコをとりに行く。(映画『アレクセイと泉』より)

**本橋** ● 森林組合の方たちにしてみれば、まず森を除去して欲しいでしょうね。

**三浦** ● 本当をいえば、そうでしょうね。でも、森林は広さからしても、地形や地理からみても除染が難しい場所です。

そこで、土壌をとりのぞくのではなく、カリウム<sup>\*</sup>をまいてセシウムの吸収を抑える研究が行われています。カリウムとセシウムは化学的に似た性質をもっているため、肥料分として必要なカリウムが不足すると、土壌では作物がまちがってセシウムを吸ってしまします。それを防ぐために、農地ではカリウム施肥が行われています。

森林でも、似たような効果を期待できるだろうということで、ヒノキ林を使ってカリウムによるセシウムの吸収抑制技術が研究されています(▼14、15ページ参照)。ただ福島は森林すべてにカリウムをまくというのも現実的ではありませんね。どこに何をすれば効果的に将来への見通しをつけられるのか、研究を通してそうした情報提供をできれば、林業をやっている方たちにも、一時避難から町に戻って暮らしを再開した人たちにとっても「希望」となるのかなと強く思っています。

**本橋** ● 20年後の森の放射能の状態をみきわめなくてはならない研究というところに、三浦さんの研究の難しさを感じます。ぼくは娘がふたりいるのですが、先の世代の子どもたちに負の遺産を残すということだけはしたくない。20年待てば大丈夫、と簡単にはいえないことは、たいへんな重荷でしょう。

**三浦** ● 森林は、ある意味、懐が深いので事故

後の7年間ほとんど手入れがされていないくても、林木の生産にしても水源涵養機能にしても、それで急激に落ちるといふわけではありません。少しづつでも地道に森林管理をつづけていけば、そう大きく機能を失うことなく森を管理していくことはできるでしょう。

ただ、目にみえない放射能はあるので、作業時間とか、食べものに関わることは管理していく必要があります。もともと森林がもっている機能の潜在的な力がなくなってしまうわけではないのです。

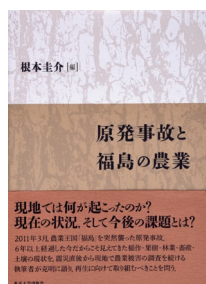
**本橋** ● 「希望」のカタチをどこにみつけ、つないでいくのかということですね。

**三浦** ● 山菜は、生ではセシウムが高いものもありますが、ゆでこぼして流せばだいぶ下がるとか、そうしたことを地域に戻って試みている方たちもいて、実際測ってみると濃度は下がっています。もともと山里の人は多くの知恵を使って暮らしてきたので、このものすごく制約のあるなかでも、なんとか楽しみながら暮らしていく方法をみつければいいとおられるようにもみえます。そうしたところにも参考になる科学的なデータを提供していかなければいけないと考えています。

**本橋** ● 暮らしの希望を見いだしたいという福島の方たちの想いに応えるための研究をされている三浦さんの立場は、いろいろ複雑な気持ちで対応しなくてはいい場面もあるのでしょうね。人の暮らしと木や土の両方に関わる研究ならばこそその奥行き、懐の深さが求められるのだと思います。

**三浦** ● ぜひ、そうありたいと思っています。

◎三浦寛観点長の  
の本



『原発事故と福島の農業』

根本圭介編 三浦寛観共著

東京大学出版会

### <sup>\*</sup>Key Words カリウム

植物の生育に欠かせない栄養素で、チツソ、リンとともに肥料の三大要素とされる。カリウムとセシウムは、元素の周期表でおなじ第1属のアルカリ金属に属し、似たような性質をもっている。